

MfG_J_Yamaguchi_Tei_Museums_and_WalkingTrail 山口邸の見学・庭園散策

長岡の中心部から車で一時間ほどの小国・横沢にある山口邸の博物館と庭園遊歩道の紹介です。

上杉謙信の家臣で郷士として越後に定住し、上杉の会津国替えのとき郷士は同行することが夢されなかつたため、小国に留まつたとされています。

小国は羽前上山藩の領地となり、山口家はその大庄屋格(村役人)となって江戸期を乗り越えましたが、歴史の表に出たのは、明治期の当主、山口権三郎と弟の野本恭八郎。

山口権三郎は石油・産業育成、日本石油の礎を作り、弟の野本恭八郎は長岡に養子に出て商人として活躍する傍ら、私立互尊文庫を長岡に寄付し、今の市立図書館の礎を作ります。

山口邸跡は、山口育英奨学会によって公開されており、敷地内には、新潟の産業史、ほか、いくつかの博物館があります。庭園と隣接する山林遊歩道は、小国の自然・植物を熟知した方々によって、ほどよく自然維持・管理されています。新緑、盛夏、秋の紅葉落葉の季節それぞれ、すばらしいの一言です。ここでは、見学記をもとにした、文書をまとめました。

山口権三郎の、新潟、そして日本の石油産業への貢献については、別文書「山口権三郎と山田又七」にまとめていますので、そちらもご覧下さい。野本恭八郎については、別文書「野本互尊翁 野本恭八郎の想い」にまとめていますので、そちらもご覧下さい。

上山藩と小国・山口家
小国横沢の山口邸
産業起業家
小國紙の改良
松山社と奨学林 (観音様と持国天と増長天)
山口育英奨学会パンフレットより
五十六の手紙
補足・研修会記録 2016年 5月12日(木)

上山藩と小国・山口家

定着した山口家

山口家の先祖が小国郷へ移住してきたのは、関ヶ原の戦い以前のことです。山口家は、上杉謙信の家臣で郷士として、中頸城郡柿崎村山口(現上越市吉川区山口)に住んでいました。
(柿崎、犀潟に近く、小国より西に30キロ)

慶長三年(1598)上杉景勝が秀吉の命で会津に国替えになったとき、郷士は同行することも村に残ることも許されず、山口家は小国郷へ移住し、新たな土地を開墾し、農業に従事しました。小国は羽前上山藩の領地となり、山口家はその大庄屋格(村役人)として、年貢の取りまとめや、水田に引く用水量の決定、村内の治安維持などに当たりました。

以後、歴代当主は子福者が続き上山藩の大庄屋格の豪農として栄え、明治期の農地解放もしのぎ、明治からの石油を元とした殖産興業を経て、今日の山口家、育英奨学会に至る。

*郷士 農村に居住し、平時は農業、戦時は兵役にたずさわる。

上山藩(かみのやまはん) ~Wiki 他より

出羽国(羽前国)村山郡の上山(現在の山形県上山市)周辺を領有した藩。藩庁は上山城。上山は、北は山形藩、南は米沢藩に隣接する羽州街道の要衝であった。

戦国時代には伊達氏と最上氏がこの地をめぐって争うことも少なくなかった。慶長5年(1600年)慶長出羽合戦で、上杉景勝の家臣直江兼続は2万5000を数える大軍を擁しながら、上山城を守る最上氏の家臣・里見民部率いるわずか1000の兵の前に大敗を喫した。しかし里見民部は後に最上義光と対立して出奔し、その後には坂光秀、次いで最上光広(義光の五男)が入った。しかし義光死後、最上氏内部では家督争いが絶えず、遂に元和8年(1622年)、最上氏は最上騒動と呼ばれるお家騒動を理由に改易された。

その後、上山には能見松平家の松平重忠が4万石で入り、上山藩を立藩した。

元禄10年(1697年)、備中庭瀬藩から松平信通が3万石で入り、ようやく藩主家が安定する。

慶応4年(1868年)、戊辰戦争が始まる奥羽越列藩同盟に参加、同盟方針に従って総督・山村率いる洋式軍隊を出羽久保田藩に派兵する。また、飛び地であった七日市が長岡の近所であったため北越戦争に巻き込まれ、別働隊を長岡に派遣した。米沢藩が新政府に恭順すると、背後からの攻撃を恐れて軍を引き上げ降伏恭順し、版籍奉還を迎えた。

現在、人口31,000の上山市。

上杉景勝

上杉氏は謙信期の天正4年に本願寺との和睦により織田氏と敵対関係になっていたが、御館の乱の混乱が続く天正9年(1581年)、乱の恩賞問題により対立状態にあった北越後の新発田重家が織田信長と通じて造反した上、柴田勝家率いる4万の織田軍に越中国にまで侵攻される。翌年には越中への出陣を約束武田氏の滅亡によってその後ろ盾を失うなど、上杉家は滅亡の危機に立たされた。

天正10年(1582年)、織田軍5万は越中を完全に制圧(魚津城の戦い)し、上杉景勝は窮地に立たされる。

窮地に立たされた景勝だが、6月2日、信長が本能寺にて自害(本能寺の変)したために織田軍の北征は頓挫し、上杉家は九死に一生を得た。

文禄元年(1592年)、秀吉の朝鮮出兵が始まると、5,000人を率いて肥前国名護屋に駐屯し、翌文禄2年(1593年)の6月6日から9月8日まで、秀吉の名代として家臣の高梨頼親らを伴って朝鮮に渡る朝鮮半島における日本軍最前線基地として熊川に城(倭城)を築城している。

文禄3年(1594年)には中納言となり、「越後中納言」と呼ばれた。

文禄4年(1595年)1月、秀吉より、越後・佐渡の金銀山の支配を任せられた。同年豊臣家五大老の一人小早川隆景が家督を小早川秀秋に譲り隠居したため、空いた五大老に景勝が任命された。

慶長3年(1598年)、秀吉の命により会津120万石に加増移封され、以後は「会津中納言」と呼ばれた。後、家康との対立から、「会津征伐」および「慶長出羽合戦」を経て、

置賜・信夫・伊達の3郡からなる出羽米沢(30万石[12])藩主として減移封され、上杉家は景勝一代において北信越の大大名から出羽半国的一大名へと没落した。

小国横沢の山口邸

小国の豪農・山口家代々の邸宅跡にある、京風回遊式庭園です。山口家は旧互尊文庫を長岡市に寄付した野本互尊(恭八郎)の生家で、地域の教育やまちづくりなど公益事業に力を注ぎました。山口家は、当時上越市吉川区山口（柿崎、犀潟に近く、小国より西に30キロ）にいたが、上杉景勝の慶長3年の会津行きについていかず、小国に来て、山口と名のつた。以後、歴代当主は子福者が続き、上山藩の大庄屋格の豪農として栄え、明治期の農地解放もしのぎ、明治からの石油をもととした殖産興業を経て、今日の山口家、育英奨学会に至っている。

山口家は代々社会公益事業の助成に意を注ぎ、教育関係については特に熱心であり、当主（山口敬太郎氏）の高祖父に当たる山口権三郎翁は、明治5年の学制に基づき居村の横沢村に独力をもって学校を設立し、のちにその設備一式に多額の資金を添えて村に寄付し、村内の子弟の教育に力を尽くしました。

～1873、明治6年山口権三郎、私費で私立金沢校を設立。(明治8年金沢小学校と改称)～山口権三郎の明治22-23年の欧米視察旅行から帰国の翌年(明治24年)、綱索式鑿井機械を米国から購入し、生産力の革新を達成した。

また翁は明治22-23年の欧米先進国視察旅行から帰国の翌年(明治24年)、綱索式鑿井機械を米国から購入し、生産力の革新を達成した。

明治25年、青年たちに実業の知識・技術を学ばせようと長岡に実業学校を創設しました。しかし当時はまだ入学希望者が少なく数年後に閉鎖するに至りましたが、素志を貫徹するため長年にわたり理・工・農の大学や専門学校の学生に学資を貸与して学業を成就させ、多大の成果を収めました。

権三郎翁の長男である山口達太郎翁は亡父の遺志を継ぎ、より広範囲に人材を募集して育英事業を拡充させるため、大正4年に多額の基金を寄付して基金を設立し、その運営を新潟県に委ねて学資を学生に貸与しました。

山口達太郎翁の長男である、山口誠太郎翁もその遺志に従って数回にわたり基金を増額し、新潟県ではこれを山口奨学資金と称して引き続き事業を遂行してきました。

しかし第二次世界大戦後の経済変動のため、活動を中止の止むなきにいたり、その基金は現在県有財産として保管されております。誠太郎翁はこれを非常に残念に思い、育英事業の復活について検討を進めておりましたが実現を見ずに昭和33年11月逝去しました。

山口順太郎翁(当主の父、誠太郎翁の長男)は嚴父の遺志を実現するため尽力し、初代理事長 山口順太郎翁部省(現文部科学省)から許可を得て財団法人山口育英奨学会を設立、初代理事長に就任しました。順太郎翁はその運営に尽瘁し数回にわたり多額の資金を寄付し、また邸内に事務所を建設して寄付しました。さらに郷土の歴史教育・社会資料保存のため昭和50年「郷土資料館」を建設しました。近年国民生活の急激資料の収集と保存を図っていくものです。

順太郎翁は平成16年2月に逝去し、2代目理事長に山口敬太郎氏が就任しました。その後、平成24年4月1日に、公益財団法人の認定をうけ「育英奨学事業」「学術研究助成事業」「郷土資料館運営事業」を柱として公益事業の拡充をめざしております。

山口平三郎（文化9_1812-明治18_1885）

山口権三郎（天保9_1838-明治36_1903）

山口達太郎（安政5_1858-大正9_1920）

山口誠太郎(明治18_1885-昭和33_1958)

山口順太郎(大正2_1913-平成16_2004)

山口敬太郎

鶴殿団次郎の石碑の背面碑文にも、大正六年五月建之の氏名に、山田又七ともに山口誠太郎の名もある。

産業起業家

小国町歴史資料館より

大庄屋山口家の長男として1838年に生まれました。
 明治19年には石油産業の重要性に着目し、
 日本石油会社を設立しました。
 当時石油は石油ランプしか需要がなかったため、
 石油ランプにかわる新しいエネルギー源として電気に注目し、
 小千谷に水力発電所を作りました。
 また、あらゆる産業の中心には銀行業があるとし、
 明治29年には小千谷金融会社・長岡銀行を設立。
 現在の北越銀行の前身となっています。
 そのほか、鉄道事業にも着手し、明治31年には信越線、
 直江津・新潟間の開通に尽力しました。
 小国で生まれた山口権三郎は、明治の新潟の実業界に大きな
 足跡を残しました。

敬山閣 掲示資料

新潟鐵工所
 輸入に頼っていた掘削・製油用機械を国内生産するため、
 日本石油の関連事業部門として、明治28年(1895)に設置されました。
 その後、明治43年に、船舶や鉄道車両なども製造する株式会社新潟鐵工所
 として普選法独立し、山口達太郎が初代社長に就任しました。

北越水力電気から生まれた北越メタル
 明治41(1908)、豊水期の余剰電力を活用するため、
 日本カーバイト土合工場を買収し、カーバイト生産に乗り出す。
 昭和の戦時体制下、昭和16年に電力部門が東北配電(現東北電力)に
 併合された。
 昭和17年に化学工業部門を継承する会社、北越電化工業が設立され、
 順太郎が社長に就任した。
 昭和39年に、北越電化工業は東邦製鋼、新潟製鋼所の二社と合併し、
 製鋼・圧延一貫メーカの北越メタルになりました。

小國紙の改良

敷地内には郷土資料館「敬山閣」や「小国和紙館」「農機具館」「漆器館」など四つの資料館があります。

秋、池の周りに植えられたいろはもみじが色づくと、自然の地形を生かした庭園の美は一層輝きを増します。

長岡市小国町横沢802番地

「山口権三郎傳記」(昭九)より 小國紙の改良

<http://hikozen.holy.jp/fo-ram.html>

昔より小國郷は、小國紙と稱する和紙製抄の副業を以て有名であつた。大抵の家には一通り小國紙の製抄機械がある。小國郷の富の大部は抄紙から出來たものであると云はれて居る。

山口家の祖先の中には、専ら抄紙を奨励せられた人もあつたであらうと思はる。傳來の家業を忘れぬ爲めの記念かも知れぬが、山口家の土蔵の内には、抄紙道具の一部が、今に保存せられてあるとか傳へられて居る。

却つて説く、小國郷としては其特産であつた小國紙の製造が、年々衰頽に赴くの傾向があるので、翁は大に之を憂慮せられ、之が改良の方法も無いものかと、明治二十四年四月抄紙傳習場を設立せんものと志し、参考の爲め、高知縣・島根縣・福井縣等を巡覗し、遂に高知縣は最も改良進歩し居るを認め、同縣吾川郡伊野町より教師として久松儀なる者を傭聘し、居村内に工場を設け、廿四年十月より廿六年三月迄、一ヶ年六ヶ月間生徒を募集し、改良器具を以て抄造法を傳授せしめられた。

傳習生は刈羽郡・中魚沼郡・南蒲原郡等十三人に及び、卒業生の開業したもの十一人に及んだ。

改良紙の販路は長岡・柏崎・小千谷等であつたが、その産額は完全なる調査を爲さざる内に傳習所を閉鎖するに至つた。併し小國紙改良の傳習所は確かに其成果を認め、米國コロンブス世界博覧會に出品して褒賞を得、刈羽郡物産共進會・北魚沼郡共進會より賞を得たので、一般小國紙製造者も此改良紙に着眼し、漸次改良の時機に向ひつゝあるは全く翁の賜と云はねばならぬ。

[一部旧字を新字にしてあります。]

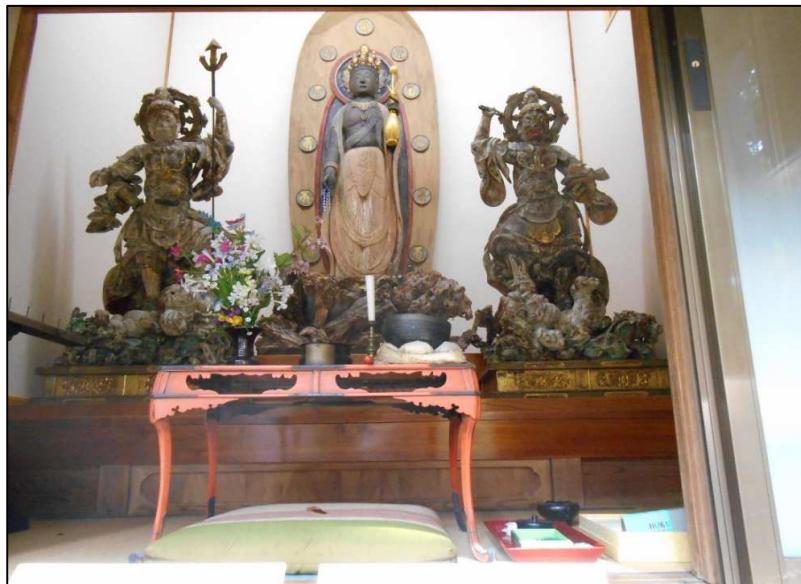
コロンブス万国博覧会は、シカゴ万国博覧会とも呼ばれる。1893年に半年間開催。コロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念して催されたため、シカゴ・コロンブス万国博覧会とも呼ばれる。シカゴ万国博覧会は1933年にも開催されている。

山口権三郎（一八三八—一九〇二）小国町金沢の素封家出身。二代目

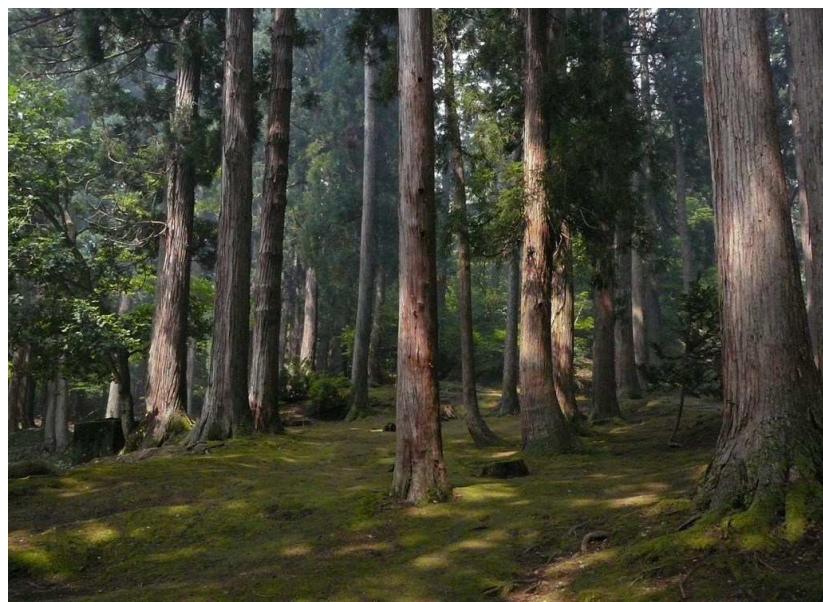
新潟県議会議長、日本石油設立など実業界でも活躍、達太郎、誠太郎、順太郎と代をつぐ。山口家には山口育英奨学会や郷土資料館が設置されており、抄紙傳習場資料も展示されている。

松山社と奨学林

松山社 向かって左に木造十一面觀音 平安末期(800-900年)、
腰から下は中越地震の大破の修理か。
右に木造二天立像(江戸末期) 持国天と増長天。
向かって右、三鈷杵をもっているのが持国天。
左、長い三叉戟(げき)をもっているのが増長天。
目には水晶を嵌めた玉眼。
※ 横沢觀音は、相野原交差点のそばにある。



熒学林



山口育英奨学会は、昭和34年8月文部大臣の許可を得て設立された公益法人で、その目的は優秀な才能を持ちながら経済的理由で修学困難な学生に学資を貸与して、有為な人材の育成を図り、また学術研究の振興助成に寄与することにあります。現在毎年百余名の学生・生徒に奨学金を貸与し、また大学および高等専門学校に学術研究助成金を交付しております。

山口家は代々社会公益事業の助成に意を注ぎ、教育関係については特に熱心であり、当主(山口敬太郎氏)の高祖父に当たる山口権三郎翁は、明治5年の学制に基づき居村の横沢村に独力をもって学校を設立し、のちにその設備一式に多額の資金を添えて村に寄付し、村内の子弟の教育に力を尽くしました。また翁は1年間の欧米先進国視察旅行から帰国すると、明治25年、青年たちに実業の知識・技術を学ばせようと長岡に実業学校を創設しました。しかし当時はまだ入学希望者が少なく数年後に閉鎖するに至りましたが、素志を貫徹するため長年にわたり理・工・農の大学や専門学校の学生に学資を貸与して学業を成就させ、多大の成果を収めました。

権三郎翁の長男である山口達太郎翁は亡父の遺志を継ぎ、より広範囲に人材を募集して育英事業を拡充させるため、大正4年に多額の基金を寄付して基金を設立し、その運営を新潟県に委ねて学資を学生に貸与しました。

山口達太郎翁の長男である、山口誠太郎翁もその遺志に従って数回にわたり基金を増額し、新潟県ではこれを山口奨学資金と称して引き続き事業を遂行してきました。しかし第二次世界大戦後の経済変動のため、活動を中止の止むなきにいたり、その基金は現在県有財産として保管されております。誠太郎翁はこれを非常に残念に思い、育英事業の復活について検討を進めておりましたが実現を見ずに昭和33年11月逝去しました。

山口順太郎翁(当主の父、誠太郎翁の長男)は歿父の遺志を実現するため尽力し、文初代理事長山口順太郎翁部省(現文部科学省)から許可を得て財団法人山口育英奨学会を設立、初代理事長に就任しました。順太郎翁はその運営に尽瘁し数回にわたり多額の資金を寄付し、また邸内に事務所を建設して寄付しました。さらに郷土の歴史教育・社会資料保存のため昭和50年「郷土資料館」を建設しました。近年国民生活の急激な近代化に伴い、郷土の社会生活用具や古い資料が散逸し、捨て去られるのを防ぐとともに、それらの資料の収集と保存を図っていくものです。

順太郎翁は平成16年2月に逝去し、2代目理事長に山口敬太郎氏が就任しました。その後、平成24年4月1日に、公益財団法人の認定をうけ「育英奨学事業」「学術研究助成事業」「郷土資料館運営事業」を柱として公益事業の拡充をめざしております。

郷土資料館・庭園のご案内
<http://yamaguchi-esf.or.jp/shiryoukan/>

長谷川邸の山本五十六手紙

長岡市(旧・越路町)にある豪農の館「長谷川邸」
母屋と座敷、長谷川家収蔵品展示室

森鷗外の書は、11代当主の長谷川赳夫(たけお)の祖母、長谷川千穂子の米寿の祝いに送られたもの。

山本五十六からの手紙

11代当主の長谷川赳夫の妻 初の訃報を知った山本五十六が、戦地から赳夫宛に書いた手紙で、山本五十六が戦死する一か月前に書かれたもの。

当時、当主は貴族院議員であり、差出先は牛込にあった議員宿舎になっている。

戦地であっても、そのような通知が、少なくとも軍の幹部に届いているということでもある。五十六の書簡が本土に着いたときには、既に五十六は亡くなっていた。

御令閨初子様御長
逝の御趣新聞紙上
に於て拝見不堪驚愕
御一統様には唯かし
御愁傷様に被為入候
御儀と想察護而敬弔の
誠意を奉表候
敬具
昭和十八年三月廿六日
山本五十六

長谷川赳夫閣下

白い封筒には
東京市牛込区東五■町四入 軒
長谷川赳夫閣下

スタンプは朱色で
軍事郵便 檢閲済 の印

その封筒が、薄茶色の封筒に包まれていた。

宮内庁
御下賜案内状
故山本元帥 (口の下に十、) 吊

長谷川邸は中越地震・中越沖地震の両方で被害を受けており、その被害・復元状況の説明。中越地震の修繕・修復工事完了直前に中越沖地震があつたが、耐震工事の効果で、壁がひび割れる程度で済んだとのこと。